

木材の工芸的利用をみつめる

利用部 資源・システムグループ 前川 洋平

■はじめに

1912年に農商務省山林局が編集（大日本山林会が出版）した『木材ノ工芸的利用』は、わが国の木材利用に関する歴史的な文献です。わが国における有用樹木の特性と木工品等への用途を丁寧に解説されています。同書からは、森林資源の利用用途が多様であることや利用するための人間による知恵や技術など、森と人との関係性を知ることができます。

著者は学生時代、いわゆる木工職人と出会い、手仕事に興味を持ちました。職人の持つ知恵や技術を次世代につなぐためにはどうしたらよいのか、ということを考えるようになりました。

■伝統工芸品を森林科学の視点からみつめる

ひとことに伝統工芸品を研究するといっても視点も対象も様々です。まずは定義してみましょう。経済産業省は1974年に「伝統的工芸品産業の振興に関する法律」を施行しており、「伝統的工芸品」として、次の要件にすべて合致するものと定義しています。すなわち、①日常生活の用に供されるもの、②製造過程の主要部分が手工業的、③伝統的な技術又は技法により製造、④伝統的に使用されてきた原材料が主たる原材料である、⑤一定の地域で少なくない数の者が製造に従事、です。この「伝統的工芸品」として指定を受けることで、同省が行う補助金等の支援を受けることが可能となります。これらはいわば“公的な支援を受けるため”の定義ですので、もう少し機能的に定義してみます。前川ら（2015）は、伝統工芸品を歴史性・地域性・合自然性・実用性を兼ね備えた有形物、としています（図1）¹⁾。つまり、地域資源を活用し、風土に合わせた実用的な製品、ということがいえそうです。

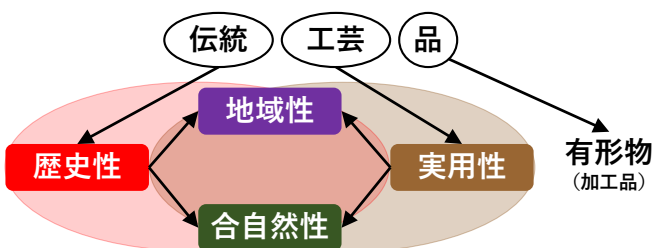


図1 用語「伝統工芸品」の定義

森林資源を原材料とする伝統工芸品は2025年現在、577品目（「伝統的工芸品」以外も含む）が確認され、126樹種が用いられています（表1）²⁾。木材利用量は生産品によって異なりますが、用途の広がり（多様性）があるといえます。森林の資源利用を考えた時、出口（需要先）がたくさんあることはリスクヘッジとしても評価できるはずです。

表1 樹種別の工芸品利用状況（上位10種）

樹種	品目数	樹種	品目数
タケ	140	スギ	71
ウルシ	131	マツ	49
ケヤキ	82	サクラ	43
ヒノキ	79	ホオノキ	41
キリ	76	コウゾ	36

注：伊瀬知・奥山（2025）より著者抜粋

他方で、伝統工芸品研究は産業史や郷土史、地場産業、デザイン学からはアプローチされているものの、森林科学からの研究蓄積はあまり無いというのが実情です³⁾。例えば林業経済学分野においては、2010年代に工芸品に関する研究課題が散見されるようになりましたが、それまでは“なんとかなる”として、あまり問題視されてこなかったものと思われます⁴⁾。言い換えると、伝統工芸品の生産環境が急速に危ぶまれる状況になった、あるいは、社会問題として表面化した、ということかもしれません。森林科学の分野からも、持続可能な生産に向けた原材料供給や販路拡大、技術開発、あるいは技術の記録としての保存など、研究蓄積が期待されているところです。

■伝統工芸品を文化経済学の視点からみつめる

2026年7月に文化経済学会＜日本＞2026年度研究大会が千葉経済大学で行われました（表2）⁵⁾。この中で著者は「伝統工芸産業の原材料問題を考えるー文化投資と産業の持続性ー」という企画セッションに登壇しました（表3）。ふだんは森林や木材の名の付く学会や研究会に参加することが多いため、論題、登壇者の所属、飛び交う用語、いずれも新鮮に感じました。

表2 文化経済学会<日本>2026年度研究大会
における報告論題（抜粋）

パート	論題	発表者
特 別 テーマ	伝統工芸産地における社会的事業承継に関する実証分析	奥山雅之（明治大学）
	産業工芸における価値の再定位－旭川家具にみる資源循環と協働の文化－	河渕智子（北海道大学）
	「アートとビジネス」研究をサーベイする	川北 眞紀子（南山大学）、後藤和子（同志社大学）
文 化 統 計・計量分析	K・POPにおけるランダム商法と消費者の購買心理	安橋正人（奈良女子大学）
	デジタル時代におけるテレビ放送産業の構造変化と持続可能性－プラットフォームの価格戦略－	西田有希子（同志社大学大学院）
文 化 資 本・教育	文化施設における教育普及活動の歴史的変容	谷口彩(SAI Co-Cre Labo)
	文化社会資本と人的資本の質－芸術文化投資を組み込んだ政府支出最適配分モデル－	八木匡（同志社大学）
文 化 行 政 と 社 会	1970年大阪万博後の地方文化イベント実施にみる合理性	田中淳士（京都大学大学院）
	AI技術の急速な発展による労働、市民生活への影響と文化政策の課題	本田洋一（大阪公立大学）
歴 史・思 想 と メディア	戦後日本における無形遺産の実践と継承における可変性を考える－UNESCO無形文化遺産・無形文化財の「民族芸能」に注目して－	劉致遠（筑波大学大学院）、池田真利子（筑波大学）
	アダム・スミスの音楽論－道徳と社会の調和－	三澤杏亮（東京大学大学院）
文 化 ・ 芸 術 と 地 域	祇園祭・大船鉾復興の実態分析－多様なステークホルダーによる文化プロジェクトの事例研究－	飯塚 まり（同志社大学）
	地方画商の成立と歩み－日本画家の書簡と聞き取りから－	鳥羽都子（岐阜県美術館）

資料：文化経済学会<日本>2026研究大会プログラムより抜粋

表3 企画セッション「伝統工芸産業の原材料問題を考える－文化投資と産業の持続性－」の内容

発表者	題目（役割）
後藤和子（同志社大学）	問題提起
前川洋平（北海道立総合研究機構）	木工品生産を取り巻く森林資源と原材料調達・供給状況の変化
中村汐里（立教大学大学院）	浄法寺漆の生産基盤と循環の生態系－国内生産約8割を担う現場と制度のリアリティー－
保田優太（経済産業省）	染織における原材料の調達及び加工の供給制約
高島知佐子（静岡文化芸術大学）	政府管理と自生による和紙の原材料生産とその変化

資料：文化経済学会<日本>2026研究大会プログラムより抜粋

登壇したセッションにおける報告内容や議論の様子は別の機会に譲り、この大会に参加して著者が感じたことをご紹介します。

第一に、ありきたりな表現ですが、広い視点で物事を捉えることの重要性を認識した、ということです。今回、“文化経済学”的思考や問題意識、分析対象の幅の広さ、に浸れたことはとても刺激的でした。ややもすると、私たちはいつの間にか「井の中の蛙大海を知らず」状態になっているかもしれません。森林や林業、木材産業が存在すること、北海道の林業、木材産業の振興に資するための研究も“当たり前”のように思いがちです。なぜ森林や林業が存在するのか、なぜ農山村や林業事業体を見つめるのか、なぜ技術を開発しなければならないのか、自ら問い直す機会の必要性を痛感しました。

第二に、他の学問分野（領域）からの「森林や木材利用への関心」に込めていく必要がある、ということです。著者の発表に対し、たくさんの反応を戴きました。一例を挙げると、“伝統産業を研究しており、原材料として森林資源は認識しているが、森林サイドの事情を知ることができたのは有意義だった”，“こちらの方で森林の話をしてほしい”，というように彼らは我々が想像している以上に森林や木材に関心を持っていると感じました。他の研究分野（領域）における議論の前進に資するために情報提供することも重要な役割であり、その“問い”に応えるための蓄積に励まなければ、と思いを新たにしたところです。

また、森林科学分野における伝統工芸品に関する研究蓄積の重要性も感じました。原材料としての木材のサプライチェーンや“質”は、いわゆる職人世界、秘匿情報という性格がありますが、これを言語化・定量化していくことが必要と考えます。

第三に、木材利用の文化的価値は、林産試験場の取り組みを別の角度から位置づける可能性を秘めている、ということです。公設試験場として“社会実装”が強く意識される中でこのようなテーマは研究課題としては敬遠しがちです。研究ニーズとして行政や企業から頂戴することもほとんどありません。それはやはり“文化”という無形で思想的な側面が背景にあると思われます。

一方で、木材は素材としての可能性、用途の広がり（多様性）があります。地域資源を利用することは風土性を育むほか産業集積、経済循環、まちづくりに寄与します。これらはいずれも自然と人間、人間と人間が向き合ってきた歴史があります。これからの北海道の森林資源と木材利用のあり方や新たな技術の開発、地域産業の展開方向などを検討する上で、木材利用の文化的側面はその成果（結果）を補強するものとして重要な役割を担うと考えます。

■おわりに

著者の肌感覚に過ぎませんが、最近になって伝統工芸品研究のブームが到来したのでは？と思うことがあります。

前述の文化経済学会では、2023年に「産業としての伝統工芸研究会」を立ち上げ、研究発表や講演会、視察等を行っています（著者もメンバーです）⁶⁾。その名のとおり、伝統工芸を産業として維持するために必要なことを議論しています。

林野庁は里山広葉樹の利活用と再生に向けた取り組みとして、多様な主体が参画して情報共有と課題解決、価値発信等を行う「里山広葉樹プラットフォーム」を2026年度中に設置予定です。広葉樹を利用する需要家の一つとして、伝統工芸品が位置づけられています⁷⁾。このプラットフォームが川上と川下をつなぐ媒体として機能し、原材料確保に向けたブレイクスルーとなることを期待したいところです（著者も一部、協力しています）。

木材の利用形態は工業製品的に大量消費することが“時代の流れ”であり、伝統的な生産の技法や形態によるモノづくりが置き去りになっているのは否めません。一方で、2026年6月に閣議決定された森林・林業基本計画には「百年つづく森の国・木の街へ」という副題が初めて掲げられました。ここには、わが国が培ってきた「木の文化」を繋げるという文脈も含まれていると思います。

高度化・複雑化する社会・経済状況において、現代もなお生産されている伝統工芸品生産の価値や意味、その技術を科学することも林産試験場が取り組む研究領域と考えています。

■参考文献

- 1) 前川洋平・宮林茂幸・関岡東生（2015）伝統工芸品研究のレビュー—研究の意義をめぐる試論—，関東森林研究，66（2），187-190
- 2) 伊瀬知紗環子・奥山洋一郎（2025）伝統的工芸品における使用樹種の現状，林業経済学会2025年秋季大会
- 3) 前川洋平（2018）伝統工芸品研究の現状と展望（創立70周年記念特集 これからの林業経済学・林政学研究），林業経済，71（6），1-8
- 4) 峰尾恵人（2026）伝統木造建造物のサステナビリティ—大径材の確保策と森林政策—，京都大学学術出版会，232
- 5) 文化経済学会＜日本＞2026研究大会（千葉），<https://jace.gr.jp/taikai/20260703-120000-3228037.html>，（2026年7月7日最終確認）
- 6) 産業としての伝統工芸研究会，<https://traditionalcrafts-asindustry.jimdofree.com/>，（2026年7月8日最終確認）
- 7) 林野庁（2026）広葉樹の取り組み，<https://www.rinya.maff.go.jp/j/keikaku/kouyouzyu.html>，（2026年6月9日最終確認）